

第2期 地域福祉活動計画 第3回作業委員会記録

開催日時：平成27年9月4日（金） 16:00～20:00
会場：2000年会館 会議室2
参加者：金田（佛教大学）、今中・岡本（県社協）
北嶋・藤岡・吉川・安川・上代（町社協）

【ヒアリング調査について】

事務局	<p>団体ヒアリングは8月8日（土）から既の実施している。対象は、小地域ネットワーク、上牧町ボランティア連絡協議会、楽しいまちづくりの会、民生児童委員協議会、自治連合会の合計15団体。</p> <p>現在（9月4日）までに6団体に実施、今後の予定は下記のとおり。</p> <p>9月14日（月） さくらんぼ（小地域） 9月16日（水）虹の会（小地域） 9月18日（金）民生児童委員協議会 9月27日（日）グリーンネット、しもまきネット（小地域） 未定：遊ingはっとり、ふれあいの会（小地域）、自治連合会</p>
北嶋	<p>ヒアリングは小地域ネットワークは世話人会に参加し、上牧町ボランティア連絡協議会は正副会長をお招きし、楽しいまちづくりの会は定例理事会に出席して参加しNPOの理事に参加して行った。</p>
金田 （佛教大） 北嶋	<p>いままでのヒアリングでどのように感じたか。</p> <p>各団体とも代表者とのお付き合いは密だが、個々の活動者とはそこまでお話しする機会もなかった。ヒアリングでは、普段あまりお話しする機会のない活動者の思いを聞いたことが収穫。</p> <p>また団体活動も知っているようで把握していないことも多いことに気づかされた。ある小地域ネットワークでは、会の広報誌を配布する際に全てインターホンを鳴して声かけをしているとのこと。社会福祉協議会（以下「社協」）では見守り活動までは出来ていないと認識していたがこれは立派な見守り活動。</p>
藤岡	<p>活動歴の長い小地域ネットワークでは、活動者が今までの活動実績に誇りと喜びを感じていることを感じた。一方で活動のマンネリ化が課題となっている。</p> <p>組織化されたばかりの小地域ネットワークでは、まだ十分に地域の生活課題が把握できていないとの声があったのが印象に残っている。そのネットワークでは社協に自分たちと活動歴の長いネットワークとの橋渡しを担ってほしいとの要望があった。</p>
北嶋	<p>活動者の話を聞いていて、地域内の住民の入れ替わり、特に開発当初からの住民と近年転居してきた人との交流の難しさを感じた。活動者も開発当初からの住民が多く、サロンを開催してもなかなか交流できていないとのこと。</p>
藤岡	<p>子どもが減ってきており、新しく開発された地区しか子どもが増えているのではないかと思っていたが、アーバンでは子育て世代が増えているということに驚いた。</p>
上代	<p>ボランティア連絡協議会（以下「町V連」）については、特に16ある所属団体間の情報共有と活動の連携が課題としてあげられていた。また、</p>

新規の加入団体を増やしていくためにも、町V連に加入するメリットを明確に伝える必要があるとの声が聞かれた。

また、上牧町では役場のいくつかの課や社会福祉協議会などボランティアの窓口が縦割りになっていて連携できていないので、町内のボランティアを包括する窓口がほしい。社協がボランティアセンターの看板を掲げてその窓口となしてほしいとの要望があった。

金田
(佛教大)
上代

町V連にお誘いするときには、何を売りにしているのか。

V保険の加入費用の社協負担、活動場所の無償提供等。

岡本
(県社協)

4年前に広域でボランティア活性化の取り組みをして以来、町V連そのものの活性化はあったか。

北嶋

活性化の取り組みは主に広域でのボランティア交流や男性を対象としたボランティア講座等の取り組みとして続けている。

岡本
(県社協)

町V連の方は情報共有を課題としているが年6回の会議でもなかなか共有できないというのが現状か。

北嶋

加入団体の活動についても主要な活用については共有されているが詳細まではなかなか出来ていない。

岡本
(県社協)

会議では主にどのようなことが議題になっているのか。

北嶋

会議内容は町V連の事業についてや社協まつり、研修について等。

岡本
(県社協)

ヒアリングで明らかになった課題に沿った議論の機会はあるのか。

北嶋

社協まつりの際にも町V連の提案で「ボランティア紹介センター」が設置され、町V連だけでなく町内の様々なボランティアが紹介されたり、ボランティアグループの紹介チラシを配布するなどの活動が行われた。会議でもいい雰囲気での議論されている。

金田
(佛教大)

活動計画にどう盛り込むのか。

1. ボランティアセンターについて

社協がボランティアセンターの看板を掲げるのか、それとも看板は掲げずボランティアコーディネートの機能を充実させるのか。

2. 上牧のボランティア推進における社協の役割について

社協として町内の多様なボランティアをどうバックアップするのか。

3. 町V連への支援について

町V連の役割の再確認。社協が町V連とその他のボランティアグループとのつながりをどう応援するのか。

岡本
(県社協)

町V連の役割を再確認する必要がある。共通する課題があるから、町V連として取り組むはず、メリットが見えるかたちに。

今中
(県社協)

メリットという議論は県社協でもよく言われる。県V連でもいろいろな意見がある。なぜ県V連はもう一度、組織を構築をし直そうとしている。

活動を活性化できるような場、情報を提供できることが集まるメリット。加入団体それぞれに活動は違うから、共通のメリットはない。だから各団体のメリットを考えるほうがいい。その情報を集めて、全体とし

てなにができるのかを考える方がいい。

金田
(佛教大)

よく「窓口は一個のほうがいい。バラバラだとわかりにくい。」と言われる。しかし、例えばサロンだと町内に1つあればいいではなく、いろんなサロンがあった方がいいはず。窓口が複数あることと分かりにくいというのは別の話。それぞれの窓口にボランティアとの関わりの歴史があり、良さもある。一本化すれば分かりやすくなるかもしれないが、それぞれが持っていた良さは失われるかもしれない。

社協としてはどのような立場でいるか。ボランティアに関する窓口は複数あっても、きちんと情報が共有されていたり、年1回は全てのボランティアで情報交換できるような機会があることの方が大切ではないか。

上牧町社協はボランティアセンターと名乗っていないが実際にはボランティアコーディネイトもやっている。このことを踏まえて、ボランティアセンターの取扱いについては社協内で議論すべき。町V連が社協になにを期待するのかを聞いて一緒に作っていく方がいい。

岡本
(県社協)

生駒市には社協にボランティアセンターがあった。市V連がとても熱心で途中から市V連がボランティアセンターを運営することになり、社協からボランティアセンター機能なくなった。その後、市民活動が広がり始めて行政がボランティアセンター機能担うようになり、市V連からもその機能がなくなった。

社協は当事者抜きで何事も決定してはいけないという思いがある。

金田
(佛教大)

例えば、既存の地域でのボランティア活動と介護保険の改正で進められているボランティア活動の両者は似ている。既存の活動の中にも活動財源等を求めて介護保険でのボランティア活動に移行するものもあるかも知れない。是非はともかく、介護保険上の仕組みの一部となることは、社協がこれまで大切にしてきたボランティア活動とは姿は似ていても根幹は異なる。

岡本
(県社協)

介護保険の予防給付が市町村事業化される。そこで行政は現状のサービスに代わる何かを作ろうと、ボランティアを養成してコーディネイトしようとしている。

今回の介護保険改正、特に新しい総合事業の体制転換は地域包括ケアシステムの中の1つの骨格をなすもの。介護問題を通じた地域作り。その手段は、協議体をつくることとコーディネーターが機能していることで、その人達がまちづくりをしていく。

このあたりの詳細は、地域福祉課題として地域福祉計画の中で考えることになるのではないか。

金田
(佛教大)

しかし、地域福祉計画にしても活動計画でも策定委員会の開催回数でいうと、みんな議論して生み出すという感じではない。そういう提案も含めて事前に役場とも調整しないといけない。社協と役場だけでなく、策定委員長も参加してもらって調整することも必要かも。

岡本
(県社協)

例えば、ボランティアや住民参加を活性化するという項目を柱として挙げるのであれば、その方策はなにかを伝える。

ボランティア講座すれば活動者が増えるかという、受講しても活動に至らない人もたくさんいる。活動者を増やすにはボランティア講座だけではなく他の活性化策がある。活動者を養成したとしてもそれだけでは活動を継続していくことは難しい。

「なぜその活動が必要か」を当事者である住民が認知する機会が必要。

金田
(佛教大)

そのテーマは、活動計画の一つの柱にもなるし、地域福祉計画とも関係する。上牧町の住民主体の活動を社協がどう支援していくかを議論す

る。

団体ヒアリングとしては成果は得られているか。残りの団体ヒアリングはもっとバージョンアップさせないといけないなとか、もっと他に聞いたほうがいいかなと思う所はあるか。

岡本
(県社協)

その団体と社協の1対1のヒアリングだけでない場が必要か。

北嶋

ヒアリングで「社協と協働してやりたい」や、個人的に課題をスムーズに伝えてもらっている。協働したいとの声を具体的な形にしたい。

岡本
(県社協)

やはりこちらから出向いて話に聞きにいくと、相手は始まりだと思ってくれる。その気持ちをがっかりさせないようにしないといけない。

【策定委員からの意見聴取と議論の場の設定について】

岡本
(県社協)

第1回策定委員会で委員から発言のあった議論の場の確保について考えましょう。策定委員はただ計画案を承認するだけでなく、次につながるような参画の仕方をしたいと思っておられる。

金田
(佛教大)

策定委員として参加するからにはきちんと発言したいし、議論したいということ。ヒアリングを通してみえてきた意見は。

藤岡

社協への期待の言葉をいただいている。社協の役割をもっとアピールし、住民に浸透させていかないといけないとの意見をいただいた。

上代

ヒアリングをとおして活動者の意見を聞くことができた。新たな発見もあったがヒアリングをお願いしたのは普段から関わりのある団体。しかし、普段あまり関わりのない人や社協を知らない住民に対してのアプローチはできていない。

岡本
(県社協)

社協と共に活動をしてきている人たちと一緒に考えていくこと、新たな人達との出会いの場を作っていくことの両方が必要。

金田
(佛教大)

社協への期待とはどのようなものか。

藤岡

社協には活動者同士をつなげる役割、個々の活動をつなげることでそれぞれを刺激し活性化させるような支援を期待されている。

金田
(佛教大)

活動者には上牧をよくしていきたいとの思いがある。
一緒に上牧のまちづくりを考えていく機会が必要。

岡本
(県社協)

まずは意見を言う場が必要とってくれた人達と話あう場を作ろう。そして、そういう場を拡大し、策定委員でなくても参加できるようにする。個別にではなく、一緒に議論する場が必要。課題について具体的な方策を話し合う。

金田
(佛教大)

話すだけで、なんの方策も解決策もないまま終わるのはいけない。上牧の課題を一緒に考え、共有していく。共有だけでなく、次へつなげる。

岡本
(県社協)

まずは第2期計画の柱立てに参加してもらえるように。言いたいことを言って終わりではなく、きとんと参加してもらおう。

- 金田
(佛教大) 社協が準備して、来て下さいではなく住民が主体的に参加できるような働きかけが必要。
住民が声をあげてくれたことは社協がやりたいと思ってもできないことで、住民のエネルギーを形にしていくチャンスである。その場に参画して社協と共に主体となってくれるメンバーを募る。
- 岡本
(県社協) 子育て世代の人たちへのアプローチも必要。
- 金田
(佛教大) 地域福祉の対象は高齢、障害、子育てなど個別ではなく、そこに暮らす全員。でも全ての人に関わることは難しい。関わりのある人、全く関わりのない人がいる。
全く関わりのない人にメンバーとして参画をお願いするのは無理なので、その間のラインの人達へアプローチする。社協と一人ではなく、一人からつながっていく。わくわく感が出るようなネーミングも必要。
- 岡本
(県社協) 議論の方向をあらかじめ用意するのではなく、まずはヒアリングをとおして明らかになったいくつかの課題を知ってもらう。以降の議論はその場で参加者と一緒に作り上げていくという手段もよいのでは。
- 藤岡 子育てサロンの利用者から活動者になってくれる人はごく一部。次につながる人は少なく、社協という存在を知らないまま通り過ぎてしまう人が多い。ぼけっと（子育てサロン）は知っているが、社協のことは知らないという人も多い。
- 北嶋 まずは関わりの深い人たちとのつどい（話し合いの場）を形にしていきたい。
- 岡本
(県社協) つどいの方はすぐにできる。まずは声を出してくれている人を大切に進める。この場に来たいと思ってもらえるような場で、まずは小規模で議論するほうがいい。作業委員会の番外編のようなイメージで。
- 今中
(県社協) 今年だけでなく、中長期的に関わってもらえるよう取り組みになるように出来れば。
- 岡本
(県社協) 一緒に汗をかきたいということが伝わるように。住民と専門職は一緒になって地域をよくしていく、とうことが伝わるようなお誘いを。